

# 優雅な世界

2008(平成20)年10月1日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督・脚本=ハン・ジェリム/出演=ソン・ガンホ/オ・ダルス/チェ・イルファ/ユン・ジェムン/パク・チヨン/キム・ソウン (エスピーオー配給/2007年韓国映画/112分)

……ヤクザ稼業と家族の絆の両立は至難のワザ。娘から嫌悪されるヤクザパパの二律背反的な生きざまは、それを実証！ オヤジが働くのは「家族のため」だが、家族がそれを認めてくれない時の悲哀は？ ソン・ガンホの熱演(?)と、何とも皮肉なタイトルの意味をタップリと味わおう。

## ヤクザ稼業と家族の絆の両立は？

企業戦士たる日本男児は家庭を顧みることなく、外に「7人の敵」を求めて戦い、さらなる飛躍を目指す。これが1960年代のモーレッツ社員の姿だったが、それに皮肉っぽく異を唱えたのが2007年3月27日に亡くなった植木等の無責任サラリーマン路線……？ 他方、アメリカでも韓国でも男たちに対して「何のために働くの？」と質問すると、「家族のため」と答える人が圧倒的に多い。したがって、彼らの価値観では仕事と家族の絆の両立は当然のことで、仕事のために家族を犠牲にするなどというのは愚の骨頂で、本末転倒もいいところ。

ノ会長(チェ・イルファ)率いる通称「野良犬組」と呼ばれるヤクザ組織で「兄貴」として権勢をふるっているカン・イング(ソン・ガンホ)も家族の絆を人一倍大切にしているタイプ。しかし今は、カナダに留学している長男ミンチョルは問題ないが、父親の仕事がヤクザであることに反発する娘のヒスン(キム・ソウン)と父親との関係は最悪。さらに、バカな行動をくり返す夫に対して妻のミリョン(パク・チヨン)の我慢も限界を超えたようで、「ヤクザを辞めなければ離婚よ！」と宣言される始末。組ではいくら「兄貴」と慕われていても、家族の絆が崩壊したのでは無意味。ああ、やっぱりヤクザ稼業と家族の絆の両立は難しい。

## ソン・ガンホがおいしい味を

今から約10年前、日本で突然巻き起こった「韓流ブーム」の原動力は、テレビではペ・ヨンジュンとチェ・ジウが共演した『冬ソナ』だが、映画ではソン・ガンホが出演した『シュリ』(99年)の爆発的な大ヒット。イケメン韓流スターではないソン・ガンホがなぜそれほど注目され、その後『JSA』(00年)(『シネマルーム1』62頁参照)、『殺人の追憶』(03年)(『シネマルーム4』240頁参照)、『グエムル 漢江の怪物』(06年)(『シネマルーム11』220頁参照)と大ヒットを連発しているのかというと、それは演技力。彼は1967年生まれだから、『シュリ』の頃はまだ32歳だったが、失礼ながらその体型は41歳の今とあまり変化のないズングリムックリ型。それでも『シュリ』で彼はキレのあるスピーディーな演技を展開していたが、『優雅な世界』ではヤクザ組織の中堅幹部として、また家族の中では2人の子供を持つ働き盛りの41歳のオヤジとして、実にいい味を見せている。とりわけ、父親としてのイングが娘のヒスンに示す愛情ははかり知れないほど深いのだが、やることは担任の先生への金品提供(?)とか、娘の日記の盗み読み(?)とかムチャクチャ。これでは娘からトコトン嫌われるのは当然だが、そんなチグハグな父親役を実年齢41歳のソン・ガンホがおいしい味を見せながら熱演!

## ここにも権力争いが

一定の目的を持った組織である以上、組織内部での権力争いが生じるのは仕方ないところ。派閥形成は権力争いの前哨戦だが、野良犬組でもノ会長の弟でナンバー2のノ常務(ユン・ジェムン)と、常務の配下にある「兄貴」のイングは互いに大きく反目している様子。イングの仕事(?)はナイトクラブに青果物を卸すことで、これは本来堅気の仕事。そんな地道な実績を認められてのし上がっていったイングが今やろうとしているのは、テチャン建設の現場を野良犬組が仕切ること。映画冒頭、そんな任務を負ったイングが、「社長」に殴る蹴るの暴行を加えたうえ、強引に契約書にサインさせる姿が描かれる。ヤクザの本性はまさにこれ。「目的のためには手段を選ばず」だから、くれぐれもご用心。イングのやり方は明らかに違法だが、これによってテチャン建設の現場を獲得したイングに対するノ会長の信頼は、従前にも増して絶大なものに。こんなイングの登用が気に入らないのが、ノ会長の弟のノ常務。テチャン

建設の仕事を「俺に譲れ」と迫ったところ、イングから逆に罵られたノ常務は怒り心頭。こんな状況を見れば、権力争いを原因とする何らかの事件発生の予感が……。

## なぜか、イングの親友は敵のヒヨンス

イングがなぜノ会長を信頼し、その下で身を粉にして働いているのかは、映画の後半明らかになるからそれをお楽しみに。イングにしてみれば、会長の弟というだけでナンバー2になっているのに、会長のためにはロクな仕事もできないノ常務とお友達になれないのは当然。そんなイングの親友はなぜか、野良犬組と敵対するチャガルチ組の幹部ヒヨンス（オ・ダルス）だから不思議なもの。

もともと男は子供みたいなものだが、イングとヒヨンスが行きつけの食堂でメシを食べながら、食堂の娘ジョンスクに惚れているヒヨンスをイングがからかう場面は微笑ましい。韓国人の言葉づかいは激しいし、行動もハードなことは先刻ご承知だが、酒と水をぶっかけ合いながら互いの友情を確認するシーンにはビックリ。この映画はあくまでソン・ガンホが主役で、オ・ダルスは引き立て役だが、『オールド・ボーイ』（03年）で見事にチェ・ミンシクを引き立て（『シネマルーム6』52頁参照）、また『恋の罟』（06年）でも淫乱小説の版元としてハン・ソッキュを引き立てた（『シネマルーム19』93頁参照）オ・ダルスがいい味を……。

## 何とも皮肉なタイトルの意味をしっかりと味わおう

この映画が面白いのは、何よりもその皮肉な「タイトル」。ヤクザ組織の「兄貴」としての生き方と家族の絆を大切に「家長」としての生き方の矛盾にこれほど悩みもがいている主人公イングを描きながら、そのタイトルが『優雅な世界』とは何とも皮肉。もっとも、イングは映画中盤から襲ってくる数々の危険を間一髪のところでも乗り越え生き延びていき、最後はホントに「優雅な世界」を手に入れたかのように見えるから、その過程にも注目！ イングを襲う命の危険の原因は、そのほとんどがナンバー2のノ常務に起因するものだが、最後の最後に訪れるあくまでノ会長に従うのか、それともヒヨンスの側に寝返るのかについてのイングの決断はスリル満点。ヤクザや政治家そして経営者など、権力争いの中核に身を置く人たちの決断の大変さがこの映画を観ているとよくわかろうというものだ。後半のスリリングな展開を楽しみながら、何とも皮肉なタイトルの意味をしっかりと味わおう。2008(平成20)年10月2日記